

# 梁啓超の朝鮮観と『佳人奇遇』の翻訳

陳 華 栄

## 一 はじめに

1898年、梁啓超（1873-1929）は柴四朗（1853-1922）著『佳人之奇遇』を中国語に翻訳し、大きな反響を呼んだ。『佳人之奇遇』は明治政治小説の代表作で、政治家である原作者柴四朗の政治的見解と意見を宣伝しようとするものである。作者は自らを主人公東海散士として登場させ、自身の見聞及び体験を基軸として物語を展開させていく。小説の中に、朝鮮農民運動、明成皇后暗殺事件、日清戦争など、朝鮮、中国と日本に関連する記述が多くある。しかし、同じく政治家である梁啓超がこの作品を翻訳する時、自分の政治立場から、『佳人之奇遇』における朝鮮に関連のある記述を含め、多くの内容を改作した。

原文における朝鮮に関する内容への梁啓超の改作から、彼が原作者柴四朗は自身の朝鮮認識に基づいて書いた内容に同意できなかったことが推測でき、これらの改作の背後には梁啓超の朝鮮に対する感情が作用していることが考えられる。『佳人之奇遇』や梁啓超の朝鮮観に関する先行研究はそれぞれ多いが、両者を結びつけて翻訳の面から考察するものは少ない。以上の状況を踏まえ、本論文は『佳人之奇遇』における朝鮮に関する描写や記述を手がかりとし、朝鮮に関する記述において訳文と原文とで一致しない部分を抽出し、梁啓超の朝鮮に対する感情と結び付けながら考察を試みるものである。

## 二 梁啓超の朝鮮観

19世紀後半、西洋列強の侵略により中国は亡国の危機に直面し、梁啓超をはじめとする清末の知識人たちは救国の道を探求し続けた。日清戦争の敗北に衝撃を受け、康有為、梁啓超などは日本の明治維新に倣って中国で変法自強運動を主導したが、まもなく失敗し、梁啓超は官僚主導の改革ではなくて、民衆を啓蒙することの重要性を認識し始め、翻訳活動や新聞・雑誌の創刊など、幅広い文筆活動を行うようになった。同じく内憂外患に悩まされていた隣国朝鮮に対して、梁啓超は戊戌変法の時期から日韓併合前後まで、十年以上朝鮮の様々な事件や状況

に強い関心を寄せ続け、「韓国近状」、「朝鮮亡国史略」、「日本之朝鮮」、「朝鮮滅亡之原因」、「朝鮮貴族之将来」などの一連の朝鮮に関連する文章を発表し、朝鮮の事情を中国国民に伝え、そこから教えを受けさせようとした。

梁啓超の朝鮮観は非常に複雑で多くの面を持っているが、以下は『佳人之奇遇』における改作の状況に合わせ、梁の朝鮮観を、中朝関係に対する認識、日朝関係に対する認識、そして朝鮮国内の状況に対する認識という、三つの方面に分け、簡単に検討しておきたい。

## 1 中朝関係に対する認識

1885年の日清天津条約によって、中国が朝鮮を保護する資格を失い、朝鮮は中日両国の共同保護の国となった。続いて、1895年の下関条約によって、朝鮮は中国に対して平等の地位に立つ独立国となり、朝鮮と中国の長きにわたる冊封関係は終結した。しかし、このような長期にわたる冊封関係の変化に、梁啓超を含め、当時の清末知識人たちは心を痛めた。彼らの心の中には、朝鮮に対してなお中国が宗主国の位置にあるような優越感と責任感とがそのまま残っていたといえよう。

例えば、自ら創刊した『新民叢報』に掲載した「朝鮮亡国史略」(1904)<sup>1</sup>という文章で、梁啓超は朝鮮の亡国の過程を「朝鮮は中日両国の朝鮮なり」、「朝鮮は日露両国の朝鮮なり」、「朝鮮は日本の朝鮮なり」という三期に分け、中国統治者の外交上の失敗を一つひとつ挙げて説明し、清政府の無能を責めた。また、『朝鮮對於我国関係之変遷』<sup>2</sup>という文章においても、梁啓超は史実を挙げながら、朝鮮と中国の関係が変化した原因は、清政府の朝鮮に対する政策の失敗にあったことを指摘し、中国が朝鮮の宗主国であることを国際社会に認めてもらうべきであったと主張している。

このように、梁啓超の心の中には、朝鮮に対して中国がなお宗主国の位置にあるというような感情と、中国の朝鮮に対する影響力の低下を惜しむ気持ちが感じられる。

## 2 日朝関係に対する認識

梁啓超は日本で14年間の亡命生活を送り、日本は自分の「第二の故郷」だと言った。梁は、中国は日本の明治維新を手本とし、その成功経験を参考にすべきだと主張したが、朝鮮問題に関しては、前述したように、「朝鮮亡国史略」、「日本之朝鮮」、「朝鮮滅亡之原因」、「日本吞併朝鮮記」などの一連の朝鮮問題に関連

する文章を発表し、朝鮮が日本によって併合された原因を分析し、日本の行為に強い反対の気持ちを表した。

梁啓超が書いた朝鮮問題に関連するすべての文章を通じて、日本に反対する気持ちは明らかである。例えば、1903年に発表された「日本之朝鮮」<sup>3</sup>という文章で、梁啓超は日本が朝鮮全土の警察権を手に入れるまでの事実経過と朝鮮の抵抗の事態を述べ、日本の野心を明らかにしている。前述した『朝鮮亡国史略』では、梁啓超は朝鮮を第一期中日両国の朝鮮、第二期日露両国の朝鮮、第三期日本の朝鮮と、三期に分けて、日中外交交渉、条約の内容など、外交史的な見地から日本の朝鮮植民地化の過程を追い、日本の意図を分析し、日本の不正義を責め、朝鮮の独立に期待している。

梁啓超のこれらの文章における日本に対する認識についてまとめれば、以下のような特徴がある。第一に、日本の朝鮮に対する行動に常に注目し、何らかの動きがあれば、最も早く文章を書いて報道する。例えば、1904年の日韓警察衝突事件が発生した際、梁啓超はこの事件への評論として、すばやく「日本之朝鮮」という文章を発表したのである。第二に、国際関係、国家財政、外交、軍事などの多くの面から日本の行為を深く分析している。例えば、日本が1904年韓国政府に提出した『内政改革案』に対して、梁啓超はそれぞれ財政、外交、軍政などの面から分析を行った。第三に、日本の行為を道義から責め、強く反対する。第四に、「唇亡びて齒寒し」という危機感から、中国はそこから教訓を受け取るべきだと主張する。このように、冒険精神を重要視し、中国の少年達の冒険精神の養成を願っていた梁啓超の熱烈な気持ちが伝わってくる。故に、冒険精神が盛り込まれた少年物語の『十五小豪傑』は、少年や国民を啓蒙するのに適切なテキストとして梁啓超によって選択されたことが容易に想像できるだろう。

### 3 朝鮮国内の状況に対する認識

梁啓超は朝鮮の亡国に中国の将来を憂慮し、中国は朝鮮の事例から教訓を受け、亡国にならないように主張した。1910年、梁啓超は「朝鮮滅亡之原因」という論文では、韓国の滅亡原因は日本にあるのではなく、韓国自身にあると分析し、中国もそこから啓示を受け、亡国にならないように注意しなければならないと説いた。

朝鮮滅亡最大之原因，實惟宮廷，今世立憲國，君主無政治上之責任，不能為惡。故其賢不肖，與一國之政治無甚關係<sup>4</sup>。

(朝鮮の滅亡の最大の原因は、宮廷にある。今は立憲の時代で、君主は政治上の責任を持たない。故に、一国の政治は君主の賢明とは深い関係を持たない。)

ここで、梁啓超は清国を朝鮮に類比させ、西太后を大院君に、光緒帝を韓廷になぞらえている感じが伝わる。梁啓超は立憲君主制の支持者であり、清国政府は上から近代化を行うべきだと主張する。故に、日本の保護国となった朝鮮に対して、近代化改革を行い、独立国になることを期待する態度を示した。

大村益夫が「梁啓超及び『佳人之奇遇』」で述べたように、光緒帝を担いで、上からの近代化に失敗して亡命生活を余儀なくされた梁啓超にとっては、明治維新になぞらえた開明的な君主を戴く君主制に朝鮮の未来があるとみたのであろう<sup>5</sup>。

梁啓超はかつて『朝鮮哀詞五律二十四首』で、日韓併合の直前に伊藤博文を暗殺した安重根と、日韓併合三日後に自殺して日本に抗議をした洪範植のことを高く評価した。

三韓衆十兆 吾見兩男兒 殉衛肝應納 樵秦氣不衰  
山河枯淚眼 風雨閉靈旗 精衛千年恨 沉沉更語誰

梁啓超はこの二人の行動に賛意を示し、二人の気概を高く評価した。ひいては、梁啓超は朝鮮の独立や未来のために行動する朝鮮人に対して、賞賛の気持ちを表しているのである。

### 三 梁啓超の朝鮮観から見る『佳人之奇遇』の翻訳における改作

『佳人之奇遇』には、朝鮮に関連する記述が多くあるが、梁啓超が翻訳する時、意識的に削除、書き加え、書き換えを行った部分が多い。以下は、原文における朝鮮に関連する記述と一致しない翻訳の一部について中朝関係に関する内容、日朝関係に関する内容、そして朝鮮国内の状況に関する内容という三種類に分けて抽出し、梁啓超の朝鮮観からこれらの改作について考察してみる。

#### 1 中朝関係に関する内容

訳文の最後の部分では、梁啓超は原文十六巻の後半における原作者による中朝関係に関する内容を全て削除し、以下のような原文にない内容を小説の結語とし

て加え入れた：

朝鮮者、原为中国之属土也、大邦之义、于属地祸乱、原有靖难之责。当时朝鲜、内忧外患、交侵迭至、乞援书至中国、大义所在、故派兵赴援、而日本方当维新、气焰正旺、欲于东洋寻衅、小试其端、彼见清廷之可欺、朝鲜之可诱也、遂端扶植朝鲜、与清廷构衅…（第十六回<sup>6</sup>）

（朝鮮は元々、中国の属国である。大国は、属国に戦乱が起これると、戦乱を治める責任を持つ。当時の朝鮮は、内憂外患で、交戦が頻発であったため、中国に援助を乞うた。属国を保護する責任があるので、中国は援助の兵は送った。しかし当時の日本は維新したばかりで、意気揚々と東洋で機会を探し挑発しようとする。清国は欺きやすく、朝鮮は誘惑しやすいと思い、日本は口実を作って朝鮮を援助し、清国との間に争いを引き起こす…）<sup>7</sup>

1885年の日清天津条約によって、中国が朝鮮を保護する資格を失い、朝鮮は中日両国の共同保護の国となった。続いて、1895年の下関条約によって、朝鮮は中国に対して平等の地位に立つ独立国となり、朝鮮と中国の長きにわたる冊封関係は終結した。しかし、梁啓超はこの小説で原文の内容を削除し、自分の考えを書き加え、「朝鮮は元々中国の属国であるため、中国は属国の朝鮮を保護する責任があり、内憂外患に置かれる朝鮮の援助の求める声に応じて援助の兵を送ったのだ」と強調する。以上で検討したように、梁啓超の心の中には、朝鮮に対して中国がなお宗主国の位置にあるような感情が残っていることが分かる。

また、原文には、

清人亦我現状ノ斯ノ如クナルヲ見相和シテ嘲リテ曰ク橘淮北ヲ逾エテ枳ト為ル倭人徒ニ泰西ノ文明ニ眩惑シ妄リニ其俗ヲ易ヘ風ヲ移サントス豈沐猴ニシテ冠スル者ニ非ヤト乃チ我國內ノ擾攘上下相闘キ相軋ルノ時ニ乗シ朝鮮ヲ併吞シテ清ノ一省トナシ琉球ヲ復シテ大ニ勢威ヲ東洋ニ張ラント欲シ先ツ天津條約ヲ蔑如シ密ニ數百ノ兵勇ヲシテ服ヲ變シテ朝鮮ノ京城ニ入ラシメ彼ノ勢道ニ啗ハシムル利ヲ以テシ土民ヲ煽動スルニ浮説流言ヲ以テシ我ト韓トヲ睽隔シ貿易ノ全權ヲ擧ケテ盡ク清人ノ手ニ收メントス我政府ノ此ニ對スル殆ト知ラサルモノ如ク優柔不斷唯其逆ハサルヲ期ス故ニ未タ數年ナラスシテ雞林半島ノ實權ハ清ノ掌握ニ歸シ我カ通商ノ勢力全羅以北ニ及フ能ハサルニ至レリ（卷十六<sup>8</sup>）

のように、原作者は清国の明治維新に対する軽蔑的な態度を描いた。その後、上記の下線を付した部分は、清国は実際に本国内が混乱している時を利用し、朝鮮を併呑し、朝鮮を清国の一つの省にすることを図り、また、天津条約を無視し、琉球を回復し、朝鮮に入り、朝鮮人を扇動して、朝鮮と日本との関係を悪くさせ、交易権ないし朝鮮全国の実権を全部清国が握ろうとしているかのように推測する内容だが、訳文は以下のようになっている。

中國人亦見我現狀如此，因相和而嘲曰，橘移淮北即為枳，倭人徒眩惑泰西之文明，妄易其俗，移其風，豈非沐猴而冠哉，遂亦有輕我之心焉。（第十六回）

（中国人もまた我々のこのような現状を見て、淮南の橘が淮北に移されるとカラタチとなるように、倭人はただ泰西の文明に幻惑され、みだりに自国の風俗を和風から泰西風に移そうとするのは、冠をかぶった猿のようなものではないかと相和して嘲笑し、我々を軽視することは明らかだ。）

原文における作者の推測、つまり清国の朝鮮に対する野心に関する内容はすべて訳者によって削除され、その代わりに前の部分の内容と呼応する「（清国）は我々を軽視することは明らかだ」という一文を追加した。梁啓超の中朝関係に対する認識から見ると、朝鮮は元々清国の属国であるから、清国は日本国内が混乱している時を利用し、朝鮮を併呑して清国の一つの省にする必要がない。また、清国政府が無能であるせいで、日本との交渉が失敗してしまい、朝鮮での影響力を失う結果になったのである。清国政府は解決策を探し、朝鮮での影響力を回復すべきである。したがって、琉球を回復し、朝鮮に入り、朝鮮人を扇動して、朝鮮と日本との関係を悪くさせ、交易権ないし朝鮮全国の実権を全部清国により握ろうというような中国人にとってこのような野心満々の記述は、梁啓超の中朝関係に対する認識とは正反対になり、このような内容にどうしても同意できない梁啓超が、結局削除と改作を選んだのは想像に難くない。

## 2 日朝関係に関する内容

原文の十六巻において、作者は韓国大院君の執政について以下のように描く：

原文：己ニシテ韓廷日本ノ要求ニ依リ大院君ヲ擧ケテ執政トナシ閔族ヲ逐

斥ウ是ニ於テ瑋準等其志望ノ漸ク達セントスヲ悦ヒ日本ノ為ス所ヲ傍觀シテ敢テ動カス後未タ幾ナラス大院君我ト隙アリ蓋シ日本ノ威力韓廷ヲ壓シテ大院君權勢ヲ擅ニスルヲ得サルニ由ル而シテ招聘ノ顧問往往選擇ヲ誤リ法令柄鑿シ人民令ヲ奉セス朝政ノ及フ所近畿幾里ノ間ニ過キス盜賊蠡屯蟻集シ皆名ヲ東學黨ニ假リテ良民ヲ掠略ス（卷十六）

しかし、梁啓超は上の原文に対して、多くの意識的な書き換えを行っていた。訳文は以下のようなになる。

訳文：已而韓廷順應民情，果舉大院君以為執政，斥逐閔族，瑋準等漸達其志，東學黨於是得勢矣，然以暴制暴，大院君為政亦失其道，民不奉令，盜賊蠡起，皆假名東學黨以掠奪良民。（第十六回）

（已にして韓国の行政府は民情に応じて、果たして大院君を推挙し執政に任じ、閔族を追い払った。瑋準などは段々その志を達し、東学党は勢力を得た。が、暴力で暴力を制し、大院君も執政に道義を守れなかった。民は法令を守らず、盗賊は蜂起し、皆東学党を名乗って良民を略奪する。）

原文のはじめの部分では、「已にして韓国の行政府は日本の要求に依り大院君を推挙して執政に任じた」となっているが、梁啓超は訳文では「韓国の行政府は民情に応じて大院君を推挙した」のように書き換えた。さらに続く原文では全瑋準などは次第に彼らの目的を達していたので、日本の行動を傍観し、自らは動かなかつたが、訳文では傍観して行動しないというような内容が削除された。これらの書き換えと削除から梁啓超の日本が韓国内政に干渉することへ反対する気持ちと、韓国の独立を希望するという気持ちがあらわれているように感じられる。

その次に、作者は韓国における日本兵站部と当地の韓国人の間で起こった動乱について、その経緯を詳しく説明している。作者から見れば、この事件は日本の責任ではなく、当地の韓国人が日本人の殺人の理由を明らかにしないまま行動したせいで発生したのである。原文は以下のようなになる：

時ニ二人ノ乞丐慶尚道洛東ノ日本兵站部ニ來リテ食ヲ乞フ我兵以テ間諜トナシ捕ヘテ之ヲ殺ス土民其故ヲ詳ニセス謂ラク日兵無辜ノ民ヲ虐殺スト憤起シテ兵站部ヲ襲フ我兵亦之ヲ知ラス以テ東學黨ノ為ス所トナス即チ急ニ黨魁崔時享ノ家ヲ圍ミテ之ヲ燒ク時享ノ生死詳ナラス（卷十六）

しかし、梁啓超は明らかに原作者の観点に同意できず、彼は原文を削除したり書き換えたり、原作者の記述した事件の経緯を大きく変え、自分の見方を入れた。

訳文：時適日本兵詭殺朝鮮二人，土人大憤，遽起襲之，日本兵以為東學黨所為也，遂圍燒黨魁崔時亨之家，時亨之生死不知。（第十六回）

（その時日本兵士は詭計を立てて朝鮮人二人を殺し、当地の朝鮮人は憤怒して日本兵士を襲撃した。日本兵士は東学党が襲撃したと判断し、東学党の首領である崔時亨の家を囲んで焼いた。崔時亨の生死はわからない。）

原文では、日本兵站部に来る朝鮮人の乞食に関して、「我兵以テ間諜トナシ捕ヘテ之ヲ殺ス」とのように、日本兵は二人の乞食をスパイだと判断したため彼らを殺し、そして当地の人たちはこの状況を明らかにしないまま、日本人が無辜の民を虐殺したと思ひ込み、憤慨して兵站部を襲ったのだが、訳文では、梁啓超は原文の関連部分を削除して、自分の意見により、日本は詭計を立てて朝鮮人を殺したため当地の人は憤怒して日本兵士を襲撃したように翻訳した。このような書き換えから、梁啓超の日本への不満な気持ち、そして朝鮮人の日本人に対する反抗への賛成の態度が見え、梁啓超の日朝関係に対する認識と合致している。

### 3 朝鮮国内の状況に関する内容

『佳人之奇遇』には金玉均暗殺事件に関する記述がある。原文には、金玉均は中国上海で暗殺された後、屍体の処理問題について、当時金玉均を庇護していた日本はその屍体を日本まで回送させようとしたが、清国は韓国と共に計画を立てて屍体を強奪して韓国に送り、それにより金玉均の屍体は韓国で悲惨に虐待されたと記述した。

原文：既ニシテ玉均上海ニ航シ忽チ李ノ術中ニ落チ兇徒ノ刺ス所トナル我邦人其死屍ヲ收メ之ヲ本邦ニ送致セントス清韓人相謀リ之ヲ横奪シテ清ノ軍艦ニ載セ警護シテ韓廷ニ贈ル是ニ於テ韓廷ノ百官賀表ヲ上リ六斷ノ刑ヲ具シテ之ヲ揚花鎮ノ河畔ニ梟ス血痕斑斑タル日本服ヲ褫キテ其傍ニ暴シ榜書シテ曰ク大逆無道金玉均ト内外人ヲシテ縦觀セシム此ノ如キモノ旬日更ニ腐肉ヲ八裂シテ八道ニ函送シ偏ク之ヲ城市ニ殉フ韓廷ノ我ヲ凌辱スル茲ニ至テ極矣（卷十六）



しかし、訳文では、

訳文：既而玉均航上海，遂墮李術，為兇徒所刺，屍首至韓庭，百官上表稱賀，暴於市上，榜文曰，大逆無道金玉均。(第十六回)

(既にして玉均は船で上海に行き、すぐに李の策謀に陥り、兇徒に殺された。屍体は韓国に運ばれ、百官は賀表を献上する。屍体を市場に晒し、立て札で金玉均は大逆無道と叱責した。)

というように、金玉均の屍体をめぐる中朝日三国の紛争や朝鮮の金玉均の屍体に対する虐待の部分は全て削除された。1894年に金玉均暗殺事件が起きた後、清国政府は朝鮮政府と同様な態度を取り、金玉均を叛臣で殺すべき人、暗殺者の洪鐘宇を英雄で慕うべき人のように宣伝した。もし梁啓超も中国や韓国で主流の報道の態度に従えば、金玉均への処罰は彼の自業自得であるという考えを持つべきであり、削除する必要はない。この部分の削除から、梁啓超の金玉均への同情の感情が見受けられ、前文で述べた梁の安重根と洪範植に示した態度と一致しているように思われる。

#### 四 おわりに

以上は梁啓超の朝鮮観を中朝関係に対する認識、日朝関係に対する認識、朝鮮国内の状況に対する認識という三つの方面から考察し、そして改作が行われた箇所への解釈を試みた。以上論考してきたように、これらの大胆な改作の裏には、梁啓超の朝鮮に対する感情が作用していたのである。中朝関係から見れば、梁啓超は心の中に、朝鮮に対してなお中国が宗主国の位置にあるような感情が残っていることと、原作者日本人の持つ中国が朝鮮に対して野心を持っているという考えに同意できないことが明らかになった。日朝関係から見れば、梁啓超は日本の朝鮮内政を干渉することに強く反対し、朝鮮人の日本人に対する反抗運動へ賛成の態度を取り、朝鮮の独立を希望するという気持ちが感じられる。そして朝鮮国内の状況について、梁啓超は朝鮮の維新運動や近代化を主張する金玉均らに対して、中国や朝鮮の政府が主導した報道の態度に影響されず、同情の気持ちを持っている。

梁啓超は感受性が豊かな人間であり、よく文章を通して自分の感情を表し、多くの「情感之文」を書いた。また、「中国韻文裏頭所表現的情感」(1922)、「情聖

杜甫」(1922)、「屈原研究」(1922)などの多くの文章において、文章において技巧によって感情を表すことの重要性を強調していた。このような「情感之文」を書く習慣と文章で感情を表すことを重視する態度は、彼の翻訳にも影響を及ぼし、梁啓超は翻訳という行為を通じて、自分の感情を訳文に込め、忠実に翻訳することよりも、自分の朝鮮や日本に対する感情によって原文をリライトし、創造的な翻訳をしていた。

## 注

- 1 梁啓超『飲氷室合集・飲氷室專集之十七・朝鮮亡国史略』中華書局、1989 p.3-14。
- 2 梁啓超『飲氷室合集・飲氷室專集之二十一・日本併呑朝鮮記』中華書局、1989 p.2。
- 3 梁啓超『飲氷室合集・飲氷室專集之十四・日本之朝鮮』中華書局、1989 p.31。
- 4 梁啓超『飲氷室合集・飲氷室專集之二十・朝鮮滅亡之原因』中華書局、1989 p.3。
- 5 大村益夫「梁啓超および『佳人之奇遇』」『人文論集』早稲田大学法学会 1974.02、p.126。
- 6 梁啓超『飲氷室合集・飲氷室專集專集之八十八』中華書局、1989 以下は同じである。
- 7 筆者訳。以下は同じである。
- 8 柳田泉『明治文学研究・第八卷：政治小説研究』春秋出版社、1967 以下は同じである。

## 参考文献

- 今村与志雄『歴史と文学の諸相—朝鮮・ヴェトナム・中国—』勁草書房 1976
- 大村益夫「梁啓超および『佳人之奇遇』」『人文論集』早稲田大学法学会 1974.02
- 薛玉琴 (2005) 「試析梁啓超对朝鮮灭亡原因的探討」江苏教育学院学报 (社会科学版) Vol,21 No.2
- 白玉陈 (2013) 『朝鮮近代爱国啓蒙運動時期小説理論的革新与梁啓超』中央民族大学出版社
- 文大一 (2011) 「梁啓超对近代韩国的认识」青島大学師範学院学报 Vol,28 No.3
- 梁啓超 (1989) 『飲氷室合集・飲氷室專集專集之八十八』中華書局
- 梁啓超 (1989) 『飲氷室合集・飲氷室專集之二十』中華書局
- 梁啓超 (1989) 『飲氷室合集・飲氷室專集之十四』中華書局
- 柳田泉 (1967) 『明治文学研究・第八卷：政治小説研究』春秋出版社